

三尾
重定
編輯

新編
小學讀本
第九

178
4
93

大日本教育會館		
三	二	
九册	五號	三架
		六函

K120.8
68a
9

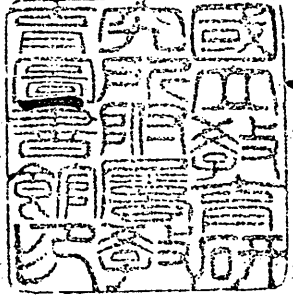
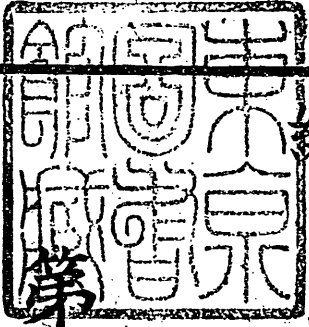
三尾重定編

新編小學讀本第九

東京 教育書院藏

明治二十年二月四日内務省交付

新編 小學讀本第九



三尾重定 編

師匠父母の我を嘖るハ。我に學藝
智識とあたへて。その徳望を得せ
しめん。ふ爲なり。然に。其命をまら

新編小學讀本

第九

一

教育書院

る。亦能ず。或ま。師匠父母の面
前へ出る。亦を厭ふ。小兒ハ。終に
其身の方向を誤りて。困窮卑賤
おち以る。亦をあるべし

古語に。益者三友。損者三友。といふ
亦やあり。此亦。一。方正なる人。
直諒なる人。或また。その見聞は富

たる人に交るとま。我に益あり。
僻事をなす人。口弁を以て亦とを
まぐる人。善や惡とを擇ぶ亦と亦
く。た。其人の言語につくが亦や
き。氣骨のなき人。交る時ハ。かな
ら。我に損ありとなし

人ハ大抵。ワガ言ニ從フ者ヲ好ス。

我言ニ逆フ者ヲ忌キラヘルハ。是ソノ智識ノ足ザルガ故ナリ。汝等。ヨクコレヲ思ヘ。我ニ從フ者ハ。ソノ學ソノ智ノ。我ニ及ザルニ由ニアラズヤ。其學其智。ワレニ及ザル程ノ人ニ。親ミ交リテ。何ニカセンヤ。苟學識智徳ヲ高クセント

思ハゞ好テ我ニ抗スルホドノ人ヲ友トスベシ

第二

朋友よハ種々ノ名あり。あるひハ金蘭。或腹心。或刎頸。或忘年。或口頭。或竹馬の類なり。兒輩よ。近く來るべし。余汝等に。朋

友の故事を語りま
かす。金蘭といひ。金と蘭との

ニッふして。金ハ堅ク。蘭ハ芳シ。され
バ朋友ホ、秘と
和げ交る時ハ。其ホとば



のかうばしき。蘭の如く。また
災殃よあひ。互に死力を竭して。防
ぎ助る其勢ハ。金鑊の如く。堅ま
な里。故に。これを金蘭のまどは
と以ふ
腹心といひ。互に隔なく。親み交りて其
心と一にさる。故に。これを稱し

て腹心といふ
 刎頸といひ。たとひ頸を刎らるゝと
 も。其人の爲よひ。是はしゝも厭ひさ
 けざる。といふを以て。是を名づけ
 て。刎頸の友といふ
 忘年といひ。其學其技の志やま就て。
 齡の多少を論ぜる志となく。老少

志たりく交る故に。忘年の友とい
 以へるなり
 口頭といひ。意の相あはざれども。言
 語の上ふて。親くするを。口頭のま
 ドは里といふ
 竹馬といひ。幼稚の時よ里あひ親み
 て。永く志の變らざるを。竹馬

の友といハ。名づくるなるなり。され幼少
のとき。竹馬に乗て。共に遊び。ゆ
ゑなるべし

第三

尺蠖トイフ蟲ハ。其形ガヒコニ似
テ。木葉ヲ喰ヒ。老レバ則室ヲ造リ
テ。其中ニ入り。終ニ化シテ。蛾トナ

ルナリ。此蟲。サキヘ出ントスルニ
ハ。首尾ヲ合セテ。屈シテ後ニ伸ル
ナリ。其狀。人ノ大指ト食指トヲ以
テ。物ノ尺ヲ量ルガ如シ。故ニ名ヅケ
テ「シヤクトリム」ト云。人モ亦カ
クノ如ク。其志ヲ達セント思ハズ。
夙ニ起キ。夜ニ寢テ。心ヲ碎キ。身ヲ

痛メ。ヨク其艱苦ニ夕へ忍ビテ。屈伸ノ理ニ違フ勿レ

多くの童子。雨の降るを詠め居り。一人の小兒。老人の前ふゆき。雨の如かにして降るものな里や。と問けまば。老人その兒を顧て。汝ハ賢きものな里。余汝の爲に。其理を

語り聞まべし

凡物の無盡性といひて。盡るはなまき者なり。然ども他の力によりて變化するは常なりとす。譬は。火鉢よかけたる鐵瓶の水と。看よ。はじめの鐵瓶一杯よ満たまきども其湯のわきあがるに隨て。漸

に減少し。愈沸騰して止ざる時ハ。
 遂にすゑの水を
 無きに至る。其水
 全きえ失たる
 にあらざ。外物の
 爲に變化し
 て。みな空中にとび



散るなり。雨ハ則ちの理よりて。地
 中の水氣。空中より上り。冷氣に遇て。
 雨となりて。降るものなり。とぞ教
 ける

第三

氣候ハ四時ニヨリテ。寒温冷熱ノ
 差アリ。サレバ。人ノ衣服モ。亦コレ

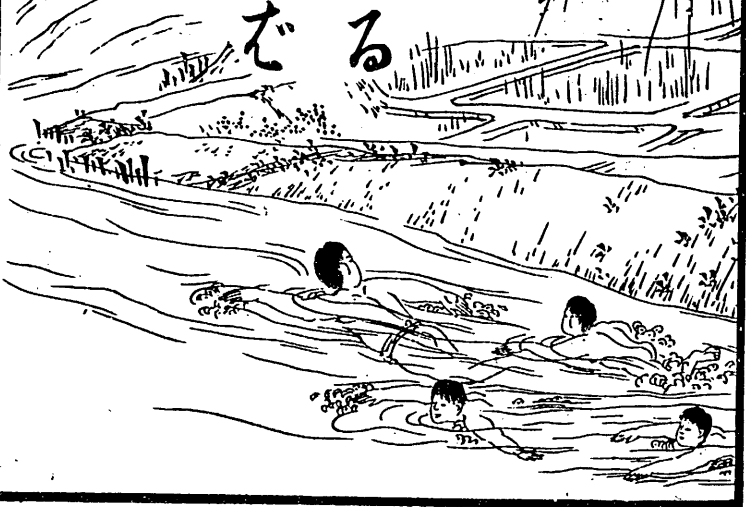
二隨ハザルベカラズ
衣服ノ染色ニハ種々アレドモ夏
ハ多ク白キヲ用ル。冬ハ多ク黒キ
ヲ好ムハ皆ソノ基ク處アル故ナ
リ。或ゴレヲ試験シテ白色ハ太陽
ノ熱ヲ遠ザケ。黒色ハ其熱ヲ引ク
性アルヲ發明セリ

其試験の方法ハ二の皿に氷を毛
り。一方ハ白色の布をおほひ。一
方ハ黒色の布を用ゐて均く氷
を日光に曝せしに白色の布を
覆ひたる皿ハ其氷とくることお
そく。黒色の方ハその融る速と速
なりといふ

數多の人。流まを冒して游泳せり。
 大人あり。小童あり。一人の壯士。岸
 に上りて。兒童の方に目を注ぐ。是
 その游泳の師なるべし。
 其の技は。海河を渡る
 事とを業とせる
 人の勿論。それよ



か、いらざる人。と以へ
 ども。不慮の水害
 にか、は、は、ある
 よ。當りては。緊要なる
 術。一術なり。されむ
 汝等。夏日學校の休
 暇なぞ。よ。宜く



此の技を學ぶべし。然ども。此を習ふに。必此の業に熟練せる。大人に従ひて。其教を受く。極まら。吞む。たゞに其業の。以とづら。事と。其命を失ふに至る。此やあるべし。

第四

多クノ人。一室ニ會スル時ハ。ヨクソノ窓ヲアケ放テ。空氣ノ流通ヲ謀ルベシ。人々吸フトコロノ酸素ト云モノハ。躰中ノ炭素トイヘルニ混テ。炭酸瓦斯トナリ。復口中ヨリ出ルモノナリ。此氣漸室内ニ盈ルトキハ。或眩暈頭痛ヲ發シ。或

マ夕嘔吐ヲ催シ。甚キニ至リテハ。卒ニ倒テ。一時ハ前後ヲ覺エザルニ至ル。サレバ。學校ソノ外。一室ニ在テ。衆人同ク會スル所ニテハ。時々戶外ニ出テ。新シキ空氣ヲ呼吸スベシ。其家煉瓦ニシテ。窓ニガラスヲ用牛タル室ナドニテハ。殊ニ意

ヲ注グベシ

人の身躰ハ。強弱を論せど。常に沐浴して。其皮膚を洗ひ清むべし。凡て皮膚は。小き孔ありて。其身は。無用の汚物など。此孔より散出す。汚物散ずれば。皮膚の働き全して。身躰健ふり。然に。沐浴を怠る時ハ。垢の爲

孔塞りて。此働きを失り。故に。其汚物散せずして。遂に病をひきおこすに至るべし

第五

運動ハ。身體の血液をめぐらして。其身の成長を助るのみならず。病をさる。元氣をほして。精神つねに

爽快なり
然ど毛。人の身體
よハ。天稟の強
弱あり。毛一運
動して。其身の
適度をあやまつ
時ハ。身躰つかまて。おれお爲に。病



を起さずおゆるべし
さきば。其身の剛柔を慮りて。よく
其動止に注意さべし。その疲勞を
救ふよ。休息と睡眠とのみ
休息ハ。四肢ノ疲ヲ回復シ。又ヨク
消化機關ノ運用ヲ助ルモノナル
ガユエニ。運動シタル後ニハ。カナ

ラズ務メテ休息スベシ
睡眠ハ。身心ヲ安カラシメテ。身体
ヲ養フノ効。最多シト爲ストイヘ
ドモ。ソノ眠ル。多時ニ涉レバ。反
テ害トナル者ナリ。殊ニ食後ハ。消
化機關ノ運轉スル。極テ微弱ナ
ルモノナレバ。決シテ眠ニツクコ

トナカレ

人いかぶらば其質を異ふを故に。その性質と。その習慣とによりて。休息及睡眠の時を減ドて。專らその業を勉強せんと雖。敢て其身に。苦勞を覺えざる者あり。斯の如き人ハ。老衰を來せしむ速なるを。或ま

輕症の病よか、りて。頓に其死を以たせしむるべし

斯の如く説き來まば。怠惰を以害なき者と爲せに似たまごを。決して然らば。休息と睡眠とに。夥多の時間と費せよま。筋骨ゆるみて。精神鈍く。生涯懶惰の廢人となり。

空歲月を送る故に。貧窮困苦その身を責て。惡心妄想されより發り。終よハ貴ま天壽とを。全たるはを得ざるに至るべし。恐れ慎むを。まはにあらむや

新編小學讀本第九畢

版權免許 明治十九年一月廿五日
再版御届 同五月廿八日
校正三版御届 明治二十年一月十七日

定價金五錢五厘

編輯者 愛知縣士族 三尾重定

出版者 東京府士族 岩田富美

出版井 東京府士族 吉澤富太郎
發賣人 本所區松井町三町早十番地

